



恋の

一歩は

から

赤岐 夕姫の場合



## 登場人物



あかざき ゆうき  
赤崎 夕姫

- ・3年生で女子バスケのキャプテン
- ・男勝りで男友達のような軽いノリで話しかけてくる。
- ・毎日遅くまで残って練習しており、その際主人公とはよく一緒にいる。
- ・恋は特に興味もなく、女子としての意識も薄い。
- ・Hな知識は他の女子から話ぐらい知っている。
- ・勉強は苦手

「せっかくだからloniやろうぜ。」  
「なんでそっちが照れてんだよ。」

「お前が勝ったら好きに触らせてやるよ。」

## 主人公

- ・3年生で男子バスケのキャプテン
- ・負けず嫌いでよく夕姫と張り合っている。
- ・勉強は苦手だが夕姫よりはマシ。
- ・ノリもあって夕姫のことはあまり女子として見ていない。







序盤サンプル



「ふうっ、あっちーな。」

部活終わり、アタシは1人残って自主練していた。  
少し残ってやってく連中もいるけど、この時間まで残ってるのはいつもアタシだけ。  
まあ、男子バスケの方のキャプテンも残ってたりするけど、今日はいないみたいで、  
今体育館に残っているのはアタシ1人だった。



だから普段は気をつけてるけど今はいいかと、ユニフォームで汗を拭いていた。  
するとその時、体育館のドアが開いた。

「ん？あぁ、まだいたのか赤岐。」  
「おー、お疲れ。何してたん？」



「ちょっと先生に呼ば……。おまっ、隠せよ！！」


「ん？ああ、忘れてた。」

赤岐のやつがユニフォームで汗を拭いてて、インナーまで捲れてるせいで完全に下着越しのおっぱいが見えていた。  
スポーツ用なのか、色気のないブラだが、しっかりと目に焼き付けてから目を逸らした。



「なんでそっちが照れんだよ、ほれほれ見てもいいんだぜ。」  
「はか、やめろっ！！男子の純情弄ぶんじゃねえ！！」  
「何が純情だよ、ほれほれー。」

せっかくだから、ここぞとばかりにからかってやった。  
あ、そうだコイツも残って練習してくなら付き合ってもらうか。いいことも思いついたぞ。



「そうだ、せっかくだから1on1しようぜ。」  
「そ、それはいいけど早くしまえって!!!」  
「お前が勝ったら、好きに触らせてやるよ。」

赤岐がそんな提案をする。  
このやろう舐めやがって……覚悟しやがれ。



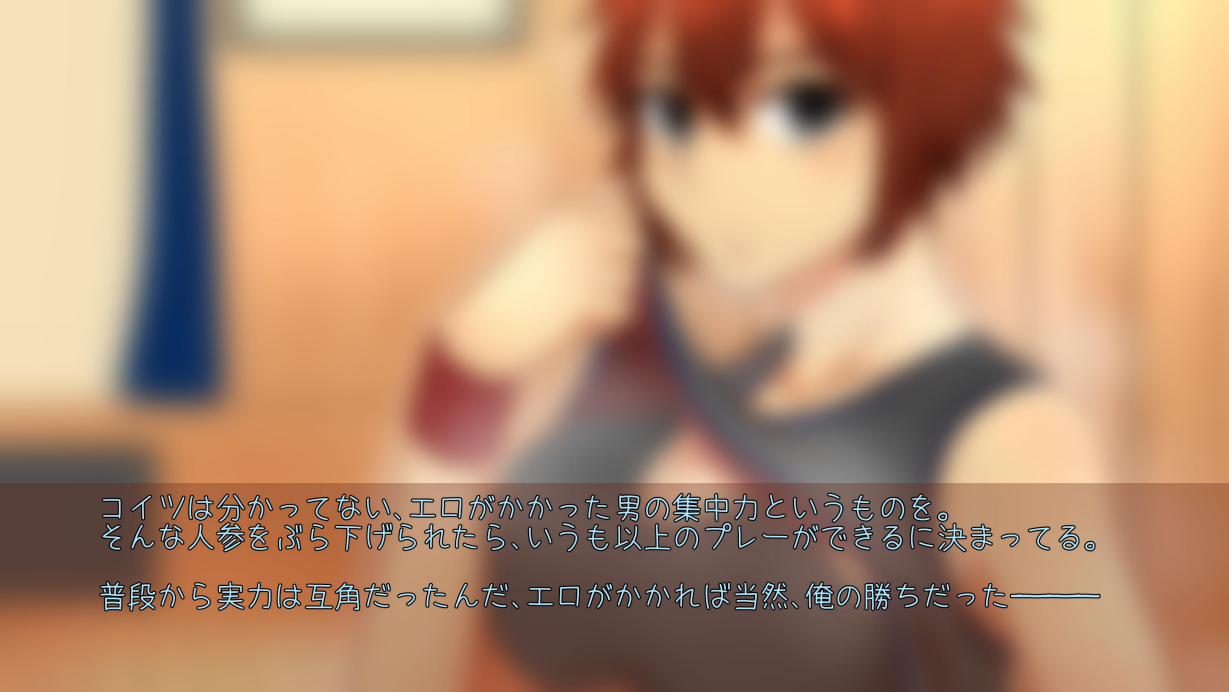
「言ったな？」

「ああ、二言はねえよ。」

「やってやろうじゃねえか、お前覚悟しろよ。」

よーし、乗ってきたな。本気で来てもらわないと練習にならないからな。  
へっへっへ、楽しみだ。

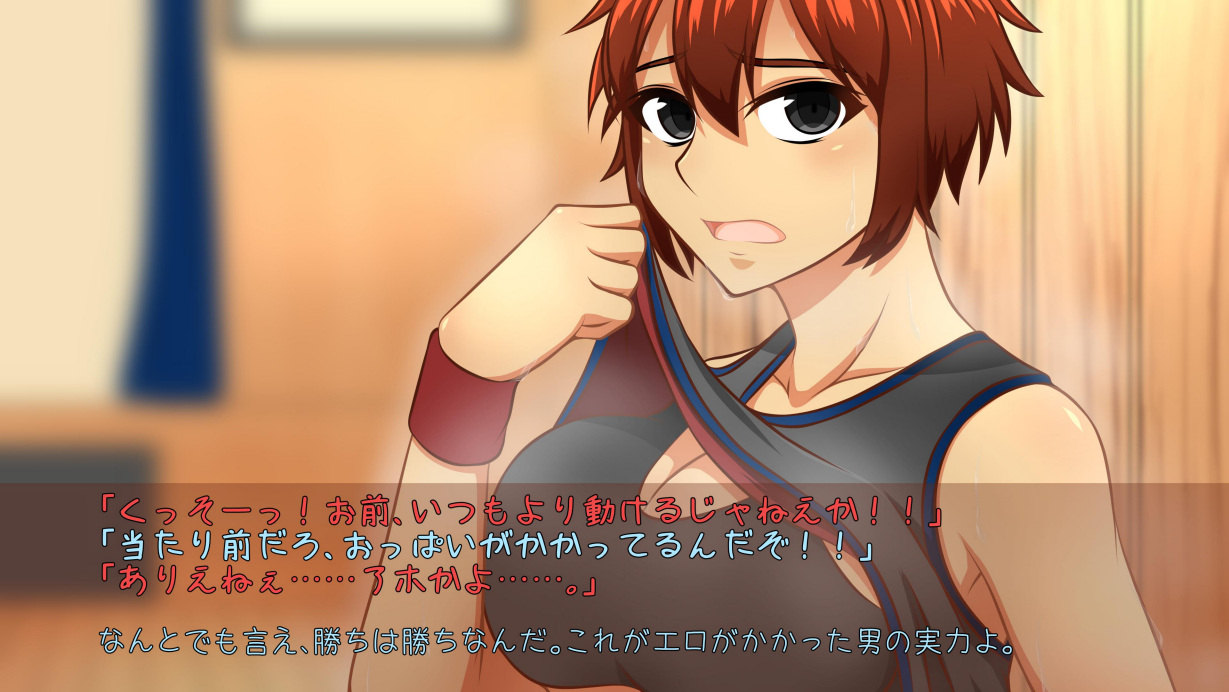




コイツは分かってない、エロがかかった男の集中力というものを。  
そんな人參をぶら下げられたら、いうも以上のプレーができるに決まってる。

普段から実力は互角だったんだ、エロがかかれば当然、俺の勝ちだった——





「くっそーっ！お前、いつもより動けるじゃねえか！！」  
「当たり前だろう、おっはいがかかっているんだぞ！！」  
「ありえねえ……了ホカよ……。」

なんとでも言え、勝ちに勝ちなんだ。これがエロがかかった男の実力よ。




「さあ、宣言通り好きにさせてもらおうか。」

「ああ……わかった、わかった好きにしろよ……。」

二言はないとまで言ったんだ、もうそれは仕方ないだろう。  
な、なんか急に恥ずかしくなってきたな……。



Hシーンサンプル



「ん♡ふうっ、んんっ♡」  
「おお、膣内熱っつ。」

アイツのちん○がお○んこに挿入ってくる。  
体の中が押し広げられる感覚はなんだかゾクゾクするが、クセになってしまう感じだ。



「ふう、挿入ったぞ。」

「あ、ああ動いていいぜ。」

さっきまで運動してたからか、ちん〇で感じる夕姫の膣内は熱いくらいだった。しかし、この熱く濡れたお〇んこに出し入れしたらさぞ気持ちいいんだろう、動いていいと言われたことだし、早速動き始めるとしよう。



「んあっ♡ああっ♡はあっ、んああっ♡♡」

「うおっ！？すご、めっちゃ締まるっ」

「何これっ♡ビクって、きたあっ♡♡」

少し動いただけなのに夕姫がビクビクッと大きく反応する、  
よほど期待してたのか、それとも単純に夕姫が敏感なのかはわからない。



「ふあっ♡あっ♡ちょっ、と待って、んあ♡」

「いや、すまん無理だ止まれねえよ。」

ヤバイヤバイ、まだ始めたばかりだってのにもう気持ちよくなってる、動き始めた途端、体にビリッとするような快感が走ってそのまま戻ってこれない。き、期待しすぎて体が待ち望んでたのか？





「んっ♡ふ、んん♡んくうっ♡」

「はぁっ、はぁっ夕姫の、熱くて吸い付いてっ最高っ」

「~~~~♡♡♡」

夕姫が快感に耐えているがそんな様になんとか可愛く見えてきた。  
相手はあの男勝りな夕姫なのに、こうして感じてる姿は女の子らしくてドキドキする。





「ん、はぁっ♡んあぁっ♡はぁ♡」

口から自然と甘い声が漏れる。  
こんなの、全然アタシらしくないっ、何とか我慢しようにも勝手に漏れ出てきてしまう。

でも、女の子でいるのって、気持ちいいかもじれない。



「悪い、動き速めるぞ。」

「んあぁっ♡♡待ってなんで、あぁっ♡」

一瞬可愛いと思ってしまったら、抑えがきかなくなってしまった。  
もっと乱れてほしい、もっと可愛く喘いでほしい、そう思って俺は動きを速めた。



「ん♡くうっ♡ん、んんう♡」  
「すまん、すぐイクからっ」  
「んう♡は、早くしろっ♡くう♡」


アイツが腰を打ちつける、もう甘い声を抑えることもできず必死でイクのを耐えていた。



「ふっ♡んんっ♡んくうっ、ふううっ♡」

「はあっ、はあっ、夕姫、夕姫っ」

夕姫はイクのを我慢しているのか、お〇んこが小刻みに締め付けてくる。  
俺も激しくしすぎて、限界が近づいてきた。そろそろラストスパートといこう。



「ああっ、イワズタ姫、タ姫っ！！」  
「んあっ♡あっ♡ああっ♡早く、しろっ♡」

アイツがさらに動きを速くする、はやく、はやくイッてくれっ！！  
そして——



「イッくうっ!!!」  
「んあっあああああっああっ♡♡♡♡」

アイツが奥まで突き入れて思いっきり射精する。  
それと同時に私も激しくイッてしまった。



「はあ、はあ……ああ……。」  
「はあ……ふう。なあ夕姫。」  
「あ？ふう……なんだよ？」

射精したばかりだというのに勃起は全く治らず、昂りも全く冷めやらない。





「このまま、もう一回いいか？」

「はあ！？お前、マジかよ……。い、良いけど……。」

今イッたばかりだったのに元気だなオイ。  
でも……アタシも、またあんな風になれると思うと、期待してしまっていた——





続きは本編で！！